

抑制機能の加齢変化
- 練習効果と反応形態の違いに注目して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
森川 忍

Key words : 抑制機能 練習効果 反応形態

自分の意図どおりに行動を始動したり，停止する機能のうち，行動を抑える機能は抑制機能と呼ばれる。合目的な行動の遂行において不必要な思考を抑制したり，適切な状況判断により不適切な行動を抑制することは，環境に適応するために不可欠である。本研究ではこの抑制機能の加齢変化を，これまで未検討だった側面を中心に多角的に分析することを目的とした。

実験 1 では，課題の難易度を操作した場合，どのような状況で加齢の影響が顕在化しやすいのか，課題を繰り返し練習することにより変化がみられるかどうかについて検討した。その結果，高齢者の抑制機能は一様に低下している訳ではなく，遂行すべき行為の内容を変えなければならないような場面で，加齢の影響を強く受けていることが明らかになった。また，高齢者の認知的特性として，個人差が大きいこと，新奇な場面で柔軟に対処することが困難であることも示唆された。しかしながら，見かけ上一度低下した抑制機能であっても，繰り返し練習することにより維持，あるいは改善し得る可能性を指摘することができた。

実験 2 では，運動の出力段階で反応の仕方を変え，同一の刺激・課題を遂行した場合の抑制機能の変化を調べた。さらに，視覚刺激に聴覚刺激を付加して情報量を増やすことにより，抑制機能にどのような変化がみられるのかについても検討した。その結果，高齢者は反応形態の違いにより結果が異なっていた。この結果は，課題が要求する運動特性の違いだけでなく，外的環境から受ける制約と，内的環境の幾つかの要因の相互作用として捉えた方が妥当であることを考察した。また，聴覚刺激を付加したことにより，行動の始動については促進的に作用した一方，高齢者のエラーが増大し，デメリットの方が大きかった。

以上の結果を踏まえ，高齢者の日常生活場面における抑制の問題を解決するための知識や手段について考察した。

